

台南文学

大東 和重著

台南は台湾南端、北回歸線以南の熱帯地域に属し、初夏には鳳凰木が一面緋色に咲き誇る。著者は台南の大学で1999年から2年間、講師を務めた。任期を終え、茫然とした気持ちで帰国したが、そこでたまさか、自分の先駆者を発見する。アラビアン・ナイトのアラビア語原典からの翻訳で知られる前嶋信次。28歳の春、32年に第一中学校に赴任した前嶋は、台南の地で8年の雌伏期を過ごした。

本書は台南を舞台に、日本統治下の華麗島（台湾）に新たな照明を与える。主要な登場人物は、前嶋の私淑した佐藤春夫、『陳夫人』で大東亜文学賞を得た庄司総一、戦前の台湾日本語文壇を牽引した西川満、民俗考古学を台南で唱道した國分直一、最後に登場する新垣宏一の周辺には台南出身の友人たち。「金儲けの神様」邱永漢も新垣とは莫逆の友。

戦前期の台南は総督府の置かれた台北とは装いを異にした。38年の台北市では日本人人口が3割ほど、台南地域では僅か会がなお濃厚に残っていた。本書は「台湾文学」ではなく、

日本統治下の多彩な文筆活動

「台南文学」と銘うつ。「外地文学」「植民地文学」「台湾日本語文学」と切り口も交錯するが、台南在住の日本人職業作家には庄司あるのみ。通称「台南学派」を成す当時少壮の学者や文人の多彩な文筆活動が現地調査から発掘され、入念に復元される。

佐藤の「女誠扇綺譚」が怪異小説の結構の下で、人身売買の悲劇に開眼する旅行者を描いたなら、庄司の「陳夫人」は、内地で高等文官試験に合格した本島人秀才と結婚した日本人妻。彼女の視点を借りて、台南社会や習俗の深層に迫った。前嶋の台南行脚は荷風の「日和下駄」の南洋版。「媽祖祭」の描写には柳田國男の「清光館哀史」に通じる情感が漂う。鄭成功の末裔が夢幻のシテを演ずる趣向の西川の小説「赤嵌記」。そこに著者は谷崎潤一郎の「蘆刈」「吉野葛」の影を認める。黒陶遺跡を発掘した國分は平埔族の「壺神」に考古と民俗の接点を探る。

高雄生まれの新垣に著者は日本統治期台南文学の最終走者を見る。島田謹二の薰陶を受けた新垣だが、皇民化政策の矛盾も高女教師の眼は逃さない。総督府情報課からの委託作品「船渠」は、海軍将校から内容不穏当として注意されたとか。著名な政治家となるこの将校が誰なのかは、本書を細く読者のお愉しみ。マダガスカル原産の鳳凰木は台南市街に移植された。その開花から落花への移ろいに、著者は統治期台南日本語文学の消長と変遷との月日を託している。



関西学院大学出版会・3400円）
おおひがし・かずしげ 73年生まれ。関西学院大教授。専門は日中比較文学、台湾文学。

《評》国際日本文化研究セン
ター教授 稲賀 繁美